

JET からの手紙

私たちと島根の縁

元松江市国際交流員（現北京ファナック有限公司秘書）

劉佩瑶

日本と中国の草の根交流の担い手を育てる「JET プログラム」は、幼い時から私の身近に存在していました。今回は、私の父と私が島根の国際交流員として体験したことを紹介させていただこうと思います。

父が島根県初代国際交流員として活躍！

私の父は、1993 年国際交流員として寧夏回族自治区外事弁公室から島根県庁へ赴任しました。島根県は、全国で 2 番目に人口が少ない県ですが、国内最古の歴史書ともいわれる「古事記」にも登場する神話の地、出雲があることで知られています。私が、後に父から聞いた島根県の第一印象は、「静かで綺麗なまち並みと親切な人々」でした。



当時の父と島根県の同僚（右から 2 番目が父）

父が赴任した 1993 年は、島根県と中国の交流がちょうど軌道にのってきた時期でした。10 月には、島根県と中国寧夏回族自治区が友好協定書に調印し友好提携都市となりました。両地域間の交流は、島根大学と寧夏大学の研究交流、県内の民間放送局と寧夏放送局の交流にもつながっていきました。父は、こうした交流を進めるため翻訳や通訳といった仕事を行う一方で、中国の文化を伝えるため県内の各地域を歩き回ったといいます。

父が島根県に赴任していた頃、私は 8 歳でした。通信手段が発達していなかった当時、父と連絡をする手段といえば国際電話と国際郵便ぐらいしかありません。母が父から届いた手紙を大事そうに私に見せてくれたのを良く覚えています。また、公衆電話からの国際電話は当時深夜 0 時以降が安くなることから深夜に父からの電話がよくかかってきたことを鮮明に覚えています。父は、「交流員の仕事は大変だが、周りの人々の支えのおかげでやりがいがあり毎日充実している」と話していました。父が島根県庁を離れる時は、県庁の職員 40 人程が松江駅まで見送りに来てくれたそうです。父の話を聞くうちに、私も日本語を学び国際交流員として活躍したいと思うようになりました。

国際交流員として島根県松江市に！

高校を卒業後、大学で日本語を学び、大学を卒業後は島根県立大学の大学院へ留学しました。その後、寧夏回族自治区外事弁公室へ入り、2010 年 4 月に念願の国際

交流員として島根県松江市の松江市国際交流会館へ勤務することになりました。父が17年前に暮らした街で、今度は自分が国際交流員の仕事ができると分かった時はとても嬉しかったです。



国際交流員の同僚たちとの写真

国際交流員として松江市国際交流会館ではたくさんのことを学びました。父と同様に松江市の市民を対象に、国際交流出前講座を行いました。市内の小学校、中学校、公民館などへ行き中国の子どもの遊び方、中国の民族衣装の着方、中華料理の料理教室などを行いました。子どもたちからもらった手紙や折り紙などのプレゼントは本当に嬉しく、今でも大切に保管しています。中国に興味のある地域住民の方を対象に、中国語講座も行いました。1週間に1回の講座を8回かけて行うのですが講座の準備は毎回大変でした。中国語特有のピンインを伝えるのに苦勞し、受講者からの質問に答えられるように一生

懸命勉強したのを覚えています。中国語の歌をみんなで歌えるようになることを目標に一生懸命教え、中国で有名なテレサ・テンの「甜蜜蜜」と一緒に歌えたときは感動しました。

国際交流員の仕事を通じて自分の国を客観的に見る機会にも恵まれました。松江市は、寧夏回族自治区銀川市のほかに、浙江省杭州市とも友好提携都市です。2010年には杭州市からの招待で松江市は、国際茶文化交流会に参加し、私も随行通訳として同行しました。中国はとても大きい国で東西南北により文化が大きく異なります。北部で生まれ育った私にとっては、お茶は飲み物のひとつとしか考えていませんでした。しかし、杭州市でお茶の作法を学び、茶文化を知ることによって改めて自分の国を理解することができました。

結びに ～日中間草の根交流の 担い手として～

今、JETプログラムを終えて5年間の過ぎましたがこの間の経験は得がたいものでした。今は、北京で日系の企業に勤務していますが、周りの友人たちには松江市で経験したことをよく話します。また、父も外事弁公室を退職しましたが、今でも懐かしそうに島根県で働いていたことを私に教えてくれます。JETプログラムでの経験に感謝して、日中間の相互理解のためにこれからも微力ながら頑張っていきたいです。



松江市の小学生たちと交流する風景

プロフィール



劉佩瑤

中国寧夏回族自治区生まれ、大学卒業後島根県立大学へ留学。2010年～2011年島根県松江市で国際交流員を勤め、今は北京ファナック有限公司勤務。

JET LETTER

我们家的岛根缘

原松江市国际交流员（现任北京发那科有限公司秘书）刘佩瑶

长期以来，JET 项目在中日草根交流中发挥着重要作用。很多年前，我的父亲也是一名国际交流员，因此，在童年时期我便对 JET 项目已有所耳闻。后来，在父亲的影响下，我也学习日语并且成为了一名“交流员二代”。很巧的是，父亲和我都是岛根县的国际交流员，今天我将向各位讲述我们父女二人的岛根情缘。

我的父亲——岛根县首期交流员

1993 年，我的父亲作为国际交流员由宁夏回族自治区外事办公室派往岛根县县厅工作。岛根县人口较少，在日本各县人口数排名中倒数第二，但岛根的出云却远近闻名，它是日本的神话之国，在日本最古老的史书《古事记》中即有记载。后来从父亲那里得知，岛根的优美景色及淳朴民风，给他留下了深刻的印象。

父亲去岛根赴任时，正是岛根县与中国的交流刚刚走上正轨的时期。当年 10 月，岛根县与中国宁夏回族自治区签订了友好协议，双方正式结为友好城市。随后，岛根大学与宁夏大学、岛根县内的电视台与宁夏电视台也先后开展了友好交流。为了推动这些交流，父亲做了大量的翻译及协调工作，同时，为了传播中国的文化等他还几乎走遍了岛根的所有市町村。

父亲去岛根县赴任的那一年，我刚八岁。当时由于信息联络方式匮乏，父亲与家里的联系只能依靠昂贵的国际电话或者书信往来。至今我还清楚地记得，因为午夜零点以后电话费半价优惠，所以爸爸经常会在零点以后给家里打来电话。对于孩童时期的我来说，爸爸就是午夜时分打来的越洋电话，或者是从妈妈手中接过的国际信件。记忆中他经常对我讲，虽然交流员的工作比较辛苦，但是在周围各方的积极配合下，每天都过得非常充实和愉快。据说，当父亲结束任期离开岛根时，有 40 多名县厅同事专程到松江火车站来为他送行。在父亲的影响下，我也暗下决心，希望将来能够学习日语并当一名国际交流员。

“交流员二代”——再续松江缘

高中毕业后，我进入大学学习了日语，大学毕业后又去了岛根县立大学的研究生院留学深造，回国后进入宁夏回族自治区外事办公室从事外事工作。2010 年 4 月，多年的梦想终于变成现实，我有幸作为一名国际交流员被派遣至岛根县松江市的松江市国际交流会馆工作。当我作为国际交流员来到 17 年前父亲工作和生活过的地方时，内心充满了激动并且感到骄傲

无比。

作为国际交流员，我在松江市国际交流会馆学到了很多。与父亲当年一样，我也经常深入松江市市民当中，为他们举办国际交流方面的讲座。另外，还前往当地的中小学校、公民馆等地方，向小朋友们及市民等介绍中国孩子的游戏、中国的民族服饰，或者教他们做中国菜等。孩子们的笑脸我至今难以忘怀，他们手工制作的折纸作品呀书信等各种小礼物我都一一珍藏着。针对对中国感兴趣的当地居民，我还为他们开办了中文讲座。该讲座每周一次，前后一共举办了八次。每次讲座开讲之前的备课非常辛苦，例如如何让大家能够尽快掌握汉语拼音，就着实让我花费了不少心思；学员们还会提出很多难以回答的问题，也需要事先进行精心的准备。为了让大家能够学会中文歌，我精心准备了邓丽君的《甜蜜蜜》，当大家一起唱响歌曲时，我倍感欣慰。

其实，通过国际交流员的工作，我们也可以更为客观地看待和了解自己的国家。除了宁夏回族自治区银川市以外，松江市与浙江省杭州市也是友好城市。2010 年，应杭州市的邀请，松江市代表团参加了在杭州市举办的“世界茶文化交流会”，我作为翻译也随团前往。中国幅员辽阔、东西南北文化差异较大，在北方出生和长大的我以前对于茶文化并不是很了解，但通过这次活动，我开始了茶道的学习，对茶文化也有了深刻的认识。通过对中日茶文化的比较，我也加深了对自己国家的了解。

结束语：将草根交流进行到底

一转眼回国已经五年了，每每回想起在日本的工作和生活，我深深感到 JET 项目的经历是我人生中的一笔宝贵财富。现在我就职于北京的一家日资企业，平时还会经常与身边的朋友及同事聊起我在松江市的经历。另外，我的父亲已经从外办退休，但他仍然会不时跟我说起他当初在岛根县工作的事情。中日友好是我们两代人的共同心愿。最后，真心感谢 JET 项目为我们提供了这么一份难得的经历，今后我们也将为促进中日相互理解而尽自己的一份绵薄之力。

Profile——简介

刘佩瑶 出生于中国宁夏回族自治区，大学毕业后赴岛根县立大学留学。2010-2012 年在岛根县松江市任国际交流员，现就职于北京发那科有限公司。